



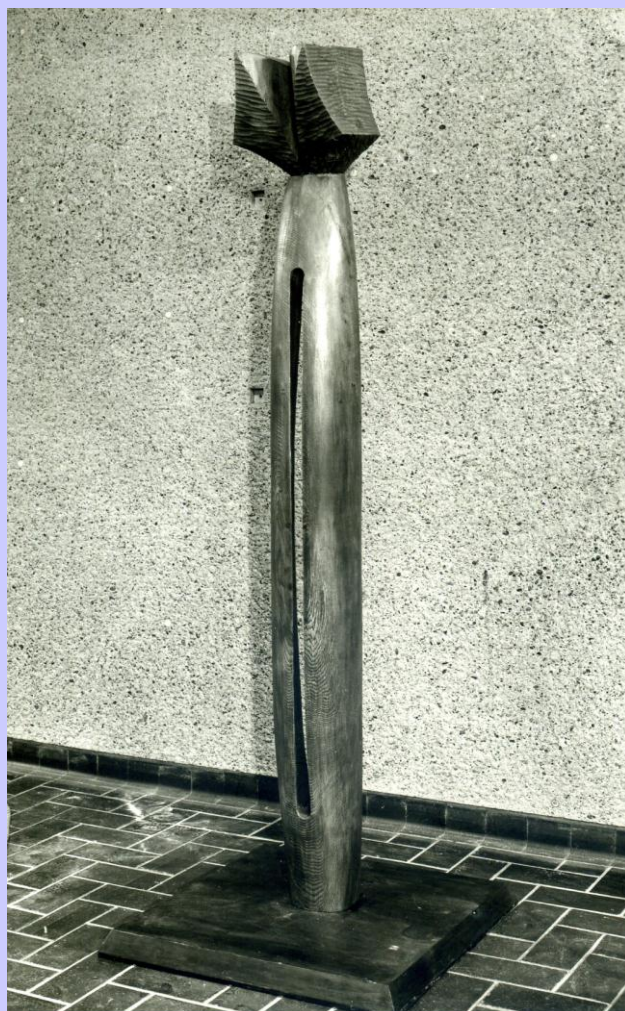
いづみ

No.33

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 3



「木の花」

板津 邦夫

自作自選 3 作者の言葉

「木の花」は、素材であるニレの木のまっすぐに伸びる性質と大木になる特徴を生かそうと用意した材料をギリギリまで使い、天空に花が咲いているようなイメージを表現しようと思いました。花には見えないかもしれませんが。

ニレの木目が美しいことから、今では高価な材木になりましたが、制作当時は建築材としては軟らか過ぎると評価が低かったため、比較的安く手に入りました。(板津 邦夫)

タイトル	「木の花」
所蔵	道立旭川美術館
制作年	1981年
素材	ニレ、拭漆
サイズ	251×29×41 ^{センチ}

連載 宮の森の四季 3 本郷新記念札幌彫刻美術館

期間限定！美術館の片隅の「隠れた名品展」

業務係 木谷 亮嗣

子どもたちに本郷新という彫刻家を知ってもらおうと同時に、彫刻の立体感を体験してもらい、創造力と感性を育んでもらおうと、当館では「移動展示・授業」という教育普及プログラムを実施しています。

札幌市内の小学校に、本郷新のブロンズ彫刻を持ち込み、学芸員の解説を付けて児童に間近で作品鑑賞してもらったあと、粘土を使った作品づくりに挑戦してもらいます。そして、完成した児童全員の粘土作品を学校ごとに期間を決めて当館の研修室に展示し、美術館に足を運んでもらうという流れです。

今回は、その展示についてご紹介します。

展示数はおよそ30点から多い学校で100点以上。ひとつとして同じものはなく、ひとつひとつが伸び伸びと自己主張しています。

また、粘土作品にちなんで付けられたタイトルもユニークで、作品とタイトルの相乗効果により見応え十二分！来館者はもちろん、当館スタッフの間でもちょっとした評判の「隠れた名品展」となっています。

子どもたちの大きく、たくましい創造力に、是非、触れてみてください。

※児童の作った粘土作品は常設展示ではありません。事前に当館にお問い合わせのうえ、展示期間をご確認ください。

歩きたくなる街

常田 益代(会員 北海道大学名誉教授)

街を歩くのが好きだ。これまで、随分いろいろな街を歩いてきた。住人としていつも歩く街。かつて住んでいた街。旅人としてはじめて歩く街、あるいはまた旅人として何度も訪ねた街。これといった目的もなしに、ただ歩きたくなる街がある。歩くたびに小さな発見があったり、歩いているだけでくつろいだ気分になる街である。多少の混沌と喧噪の中にある街でも懐かしく思い出されることもあれば、新しいビルとゴミのない清潔な街にもかかわらず記憶に残らない街もある。いずれにせよ、街の姿を見ながら歩いてみてはじめて、その来し方や市政の方針、そして人々の暮らし様が垣間見えてくる。人の興味と価値観は千差万別だから、好きな街の条件もさまざまだろう。私にとって何度でも歩きたい街は、いくつかの共通点をもっているようだ。

まず、歴史の層を見せてくれる街、つまり街の佇まいの中にしっかりと時を堆積している街である。歴史は100年のこともあれば、1000年以上のこともある。時の長短にかかわらず、歴史を造形の中に記録し、時代の精神を反映する野外芸術やさまざまな様式の建築を大切に次の世代に受け渡そうとする意欲のうかがえる街である。こうした街には過去と現在の交錯する特有の生活文化がにじみ出ている。

魅力のある街の次の共通点は親水空間のあ

ることだ。集落の形成は水とともにあるのだから当然といえば当然だが、海にせよ、湖にせよ、河にせよ、あるいは水路にせよ、水辺の空間を都市の活動の中に融け込ませている風景は美しい。水面を渡る風がその街の空気を伝えてくれる。産業優先政策の下で川や臨海地域を犠牲にしてしまったことを悔い、再び川を蘇らせたり、海沿いに彫刻公園を造ったりして、水という要素を都市計画の主役にする例も世界の各地で進んでいる。

水の次は街路樹である。街路樹は四季を運び、空気を浄化し、美しい景観をつくり、土地の在り処をおしえてくれる。昨今のように都市のヒート・アイランド化が進むとなると、部分的にも土を回復し、樹木の偉力に助けてもらえないだろう。街中の緑陰は気持ちが良い。街路樹を植えるほど確実な投資はないし、次世代への素敵なプレゼントもない。

そして、心地よい街のもうひとつの共通点は、街の中心のどこかに必ず人間優先の歩行者空間があることである。週末だけではなく、一年を通じての人間のための往来である。その沿道にベンチがあり、彫刻があり、本屋、画廊、インテリア、土地の工芸店、楽器屋、道具屋、カフェなどがあれば、もう歩くだけで幸せというものである。

友の会恒例のアトリエ訪問バスツアーが7月24日行われ、小樽市銭函在住、石の彫刻家・渡辺行夫さんの多目的芸術空間「春香山アートパーク」をはじめ、水谷のぼるさん、ダム・ダン・ライさんのアトリエを訪問、彫刻鑑賞や散策を楽しんだ。4人の参加者にそれぞれの思いをレポートしてもらった。

彫刻に親近感と高揚感**古田 重雄(一般)**

所属するシニアネットワークとの関係から今回のツアーに参加することになった。

現役時代に通いなれた小樽への国道5号線沿いの小高い丘の中腹に、かつて訪れたこともある朽ち果てた元シーサイドホテルがあった。この界隈に、彫刻家の水谷のぼるさん、ダムダン・ライさんの工房、さらに、本郷新の旧アトリエがあるとは知る由もなかった。新たな感動との出会いであった。

日ごろ、全国の至る所で見られる、情熱を傾けた作者の意欲を無にするように、野ざらし状態にされた数多くのブロンズ像や彫刻、記念碑、顕彰碑などに心を痛めていた。そういう意味から今回の「春香山アートパーク」との出会い、そして地味でも根っこの生えた札幌彫刻美術館友の会の活動に接し、何かしら彫刻への親近感と気持ちの高ぶりを心で感じた素晴らしい一日だった

五感を磨く**中村 廣子(一般)**

自分は好奇心旺盛で喜怒哀楽も大きいと自他ともに認めている。今回も触手が動き、素人が芸術の分野に首を突っ込むことになった。しかし、この体験は衝撃的だった。

水谷氏は作品に対する作家の思い、工程の煩雑さ、原材料への新しい挑戦。夢ある若者に接する熱意に頭が下がる。まなざしは鋭いが優しさがあふれている。出会った芸術家の卵は幸せだ。渡辺氏の多目的空間の石の彫刻。雨上がりの深い森との絶妙なムードはこの場に身をおいてみて感じる。二束のわらじで

活動していると聞く。まだまだ広がりをと熱く語る。

朝里川の散策では二人の方がスケッチされている姿を目にし、こういう風景の切り取りがあることを知り、メカだけの自分には「目からうろこ」だった。

今回の体験を生かさなければと、「札幌散策2010」(道新)でも読み始めようと思う。五感を磨くことになるか、それ以前に彫刻清掃に取り組むべきか！

Dara Space のこと**奥井 登代(会員)**

春香山アートパーク日帰りツアーで訪れた水谷さんのアトリエの隣にあるギャラリー、Dara Spaceの主はダム・ダン・ライ(Dam Dang Lai)さん。アトリエも兼ねている。ツアーの日、公共

トイレがないこの地域で快くトイレを貸していただいた。ライさんは春香山の古家を一人で、一階を台所と天窓のあるギャラリーに、二階を住居にと改築した。家の間際を流れていた川も



流れを変えて、滝まで作った。その周辺に作品を配置したギャラリーにツアー参加者も興味を引かれた様子だった。

ライさんはベトナム生まれ、フエ芸術大学の彫刻科を出て、同大学に留学していた札幌出身の渡辺洋子さんとの結婚を機に来日。春香山を拠点として、絵画、彫刻、デザイン、陶芸、さらには舞踏と、幅広い分野に興味関心を持

ち、それらの分野の人々と交友を深め、エネルギーに活動している。最近では春香山の自然にインスピレーションを得て作品を制作しているという。

9月にはライさんが参加するグループ展「現代美術展 PLUS1 This Place@札幌」が札幌彫刻美術館で開かれた。現代アートで活躍する作家たちの意欲的な作品が並び、札幌彫刻美術館も普段とは違ったアート空間を見せていた。春香山の Dara Spase も現在改装中だが、これからも興味深いイベントが開催されることと思う。

写真は川のそばに置かれた大きなライさんの作品。川は子供たちの格好な遊び場になっていた。

本郷新 旧アトリエ「春香山房」に見る夢

細川 房子(会員)

今年のアトリエ訪問ツアーは「春香山アートパーク(多目的芸術空間)探訪」ということで渡辺行夫さんの案内で、昨年からは着手し始めた春香山の小高い丘に設置された野外彫刻を鑑賞し、散策を楽しみました。

石狩湾が一望でき、30年以上前に廃業した「シーサイドホテル」の残骸と池や石垣が残っている何とも不思議な所です。道の奥には本郷新の旧アトリエがあり、私達はそこで届けてもらったお弁当を食べました。何年も人影のなかった山林に、50人近い人たちが訪問したことは大変なことだと思います。

アトリエは長年放置され、きれいではありませんが、アールの階段やグリーンと赤いレンガがおしゃれな暖炉、二階に突き出したベランダや空に突き刺すような三角屋根は当時としてはかなり斬新な建物だったと想像できます。

この建物が気に入り、後日、旧小熊邸倶楽部代表の東田秀美さんに相談したところ、歴史的建造物としても価値のあるものだったということでした。建築家・田上義也(たのうえ・よしや)の

作品であることが分かりました。田上はアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトに師事し、ライトの代表作である旧帝国ホテルの建築に携わりました。戦後、北海道銀行初代頭取の島本融との出会いにより、道銀本店やユースホステルの建築など、北海道の建築界に大きな足跡を残しました。



私たちが今回見た春香山の旧本郷新アトリエは当時、「春香山房」と呼ばれ、三角屋根の形状は、旧小熊邸や北湯沢ユース、支笏湖ユースにも見ることが出来、ライトの影響を受けた田上独特のデザインであることがうなずけます。今回のことが、建物の保存や再生の方向に導くきっかけにならないのか、また、春香山が多目的芸術空間として市民の憩いの場に発展してほしいと願う市民活動の第一歩になればと願わずにはられません。

本郷新、栃内忠男らを輩出した北海高校の名門美術部「北海中学の絆—どんぐり会の仲間たち」展が7月3日から9月5日まで、本郷新記念札幌彫刻美術館で開かれた。会場には彫刻家の本郷新(旧制中学19期生)の「南部忠平選手の像」をはじめ、「泉の像(エスキース)」や「手の中の少女」などの新収蔵作品も展示された。展示された6点の新収蔵作品は平成21年度に本郷家から寄贈された作品である。また、「わだつみ像(北大)除幕式」と題する絵は本田明二を本郷新が描き、栃内忠男を本田明二、本郷新を栃内忠男が描いた作品である。本郷新の小樽市春香山のアトリエで仮の除幕式に同席していた3人によって寄せ書きされたものであり、とても貴重で魅力的な作品である。彫刻家・挿絵画家として有名な梁川剛一は「開拓の凱歌」(ポリエステル)と「キリスト」(油彩・紙)の作品2点が展示された。梁川剛一は旧制中学17期生で本郷新より2年先輩であったが、本郷新が北海中学に転入した時は5年生であったため、梁川はすでに卒業していた。札幌市羊ヶ丘展望台の「丘の上のクラーク」を制作した旧制中学33期生の坂坦道は「青年像」のブロンズ作品をはじめ7点が展示された。北海高校美術部前顧問で画家として活躍した栃内忠男(旧制中学39期生)の「翼」「ふたつの顔」「コンポジション“群”〈りんご〉」などの代表作が12点展示された。その他、現在、北海高校の美術部で活動している生徒の作品が13点展示された。これらの作品は、毎年5月16日に行っている美術部の写生遠足があり、今年は、札幌市内にある本郷新の彫刻6作品を見て歩き、最後に札幌彫刻美術館を見学し、中庭に展示されている作品を描いた。これらの作品が今回展示された。

「どんぐり会」は1914(大正3年)の創立で、当時、北海中学校に在学中の二瓶等、山田忠郎、

佐藤九二男、熊谷武二郎(旧制中学11期生)の4人が絵の会をつくろうと「団栗会」という名で発足させた。「どんぐり会」の名称は、お互い相手に負けじと競い合い、高めながら、自らを鍛えみがく「どんぐりの背くらべ」からつけたという。翌年の9月に第1回校外展が北1条西6丁目にあった倶楽部(ローリー館)を借りて行われたのが、「どんぐり会展」のはじまりである。第10回展～13回展は、春と秋に年2回開催された。当時の生徒には、菊地精二(旧制中学21期生)がおり、2年先輩に本郷新がいた。その後、菊地精二の弟である元顧問菊地又男(旧制中学30期生)の時代になると道展への出品者が多くなった。

栃内忠男が昭和23年に北海高校に勤務した時は、全道美術協会会員の斎藤洪人(高校2期生)や同会員の玉村拓也(同4期生)がいた。特に、高校4期生の部員が多く、第1回さっぽろ雪まつりの雪像づくりに参加したり、写生会を催したり、文集を発行するなど活発な活動をした。

私は1986年より美術部顧問をしているが、絵は強制して描かせはしない。自分から描きたい気持ちになり、素直な気持ちになって自然にキャンバスに向かっていなければならない。毎日の追求が不思議と絵を構成していく力となり、次の制作に繋がっていく。一枚のキャンバスに創造させていくことのすばらしさは絵を描く喜びであろう。

今年の2月に100回記念展を終えて、継続は力なりということをつくづく体感した。芸術は人の心を癒し、美しく感じる心を育てる。生徒は日々鍛錬し、心を耕し、力を蓄えている。「どんぐり会」の精神は文化を大切にする人に育つことであろう。そして、過去の諸先輩が培ってきた、その精神は今もしっかりと受け継がれているとおもう。

シンポジウム2010「北の彫刻」

中島公園「木下成太郎」像テーマに

中島公園内にある朝倉文夫作「木下成太郎」像をテーマに野外彫刻について語り合うシンポジウム2010「北の彫刻」が10月17日、札幌・中島公園のパークホテルで開かれる。友の会、東京武蔵野美術大学校友会北海道支部などで構成する同シンポジウム実行委員会の主催。

同公園内の「木下成太郎」像の清掃活動などを通じて、木下成太郎が戦前の道選出国會議員で、東京・大東文化大、武蔵野美大、の創設者であること、また、像の制作者、朝倉文夫が明治から昭和を代表する著名な彫刻家であることなどが分かったことから、同像をめぐるさまざまな角度から市民文化のあり方を探る。

シンポジウムは17日午前10時から中島公園内の野外彫刻清掃作業で始まり、午後1時からパークホテルでシンポジウムを行なう。基調講演は黒川弘毅・武蔵野美大教授が「屋外に設置されたブロンズ彫刻の保存」、ついで亀谷隆・北海学園大非常勤講師が「木下成太郎の事跡」、坂井文・北大大学院准教授が「都市と野外彫刻」を講演、コーディネーター・高橋淑子友の会会員が「朝倉

文夫の芸術」をスピーチする。シンポジウム終了後、「木下成太郎」像の鑑賞を行なう。解説は長峯慰子友の会会員。

久保田宇部市長来札

橋本会長らと懇談

9月に伏木会員が宇部訪問

昨年春、宇部市の彫刻ファン倶楽部の一行が来札、友の会が野外彫刻を案内したことが機縁になって宇部市との交流が深まっている。

この8月に久保田后子(くぼた・きみこ)宇部市長が札幌市を表敬訪問、橋本会長らと懇談した。同市長は「今後、情報やノウハウを交換しながらそれぞれが個性を生かした彫刻のまちづくりに取り組んでいきたい」と宇部市のホー



ムページで札幌視察の報告を述べている。

さらに、9月には伏木忠了会員が宇部市を訪問し、同市のロータリークラブ会員らと懇談、両市が彫刻をテーマに今後も交流を深めることなどを話し合った。

写真は中島公園の彫刻を鑑賞する久保田宇部市長(右から2人目)

函館パブリックアートの旅

10月12-13日(1泊2日)

道立函館美術館など見学予定

今年の友の会主催、秋の彫刻鑑賞バスツアーは「函館美術館とパブリックアートを巡る」として10月12、13の両日、行なわれる。

12日午前8時10分、NHK前を出発。函館では道立函館美術館で開催中の「静かな奇譚 長谷川湊二郎展」を鑑賞するほか、五稜郭公園、石川啄木公園、西部地区などのパブリックアート、函館山、五島軒資料館、五稜郭奉行所などを見学する。

函館生まれの長谷川湊二郎(1904-1988年)は幻想性を帯びた独自の画境を深めた作家で、初期からの代表作約120点が出品されている。

参加申し込みはすでに9月21日で締め切ったが、希望者は長峯慰子(☎511-7646)または奥井登代(☎521-3540)まで問い合わせを。会費は会員17,800円、一般18,000円(奉行所入館料、食事4食を含む)

友の会新企画 大通公園スタンプラリー

10月9日(土)10:00、13:00

大通公園2-9丁目

友の会解説部会メンバーが作成したオリジナル設問で野外彫刻の通になる初めての試み。

事務局日誌

▼7月8日＝第3回役員会(エルプラザ)。春香山麓芸術空間彫刻鑑賞バスツアー、木下成太郎関連フォーラム開催準備、会報「いずみ」33号編集企画など協議▼8月7日＝久保后子宇部市長が札幌市を表敬訪問、橋本会長らが中島公園で彫刻清掃などを紹介▼8日＝第4回役員会(エルプラザ)秋の道南旅行打ち合わせ、8月野外彫刻清掃予定、ちえりあ委託ビデオ制作スケジュール報告、会報編集会議など▼同8日＝月寒公園「永遠の像」など調査、解説ガイド研修▼23日＝大雨の中、大通公園「泉の像」ほか解説ガイド研修と清掃作業を強行▼29日＝中島公園「木下成太郎像」清掃(中島公園モニュメント研と合同)▼9月8日＝第5回役員会(エルプラザ)シンポジウム2010「北の彫刻」報告、会報「いずみ」33号校正ほか協議。

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」No.33

2010年10月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ

斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」33号 目次

自作自選3 「木の花」 板津 邦夫	表紙
作者の言葉	2
宮の森の四季3	2
巻頭言「歩きたくなる街」 常田益代	3
レポート「小樽・銭函『春香山アートパーク』探訪ツアー」	4
寄稿「本郷新と『どんぐり会』」 川本ヤスヒロ	6
友の会ニュース	
シンポジウム2010「北の彫刻」開催/久保田宇部市長来札/函館パブリックアートの旅	7
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか	8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■北の彫刻展2010

一次代をになう女性たち

会期：10月2日(土) ～11月14日(日)

北海道を拠点として活躍している作家を隔年で紹介する展覧会。生涯にわたって人間愛を貫いた本郷新の遺志を継ぎ、小さきものへの優しいまなざし、やわらかな造形など、今後の活躍が期待される女性作家を紹介する。

■展示替え、改装工事のため11月15日—12月17日まで臨時休館

記念館

■本郷新展：開催中～2011年3月27日(日)

版画展 8月3日—10月24日

記念碑となったレリーフ展 10月26日—1月16日

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目

☎011-642-5709

編集後記

過日、ふと思いついて北海道知事公館を訪れた。そこで彫刻家、中村晋也作の村橋久成の胸像「残響」に出会った。サッポロビールの育ての親とも言うべき村橋のこの像は札幌の作家、田中和夫さんが歴史に埋もれていた村橋を小説「残響」に描き、世に出したのがきっかけで北の大地にお目見えした。開拓使の役人の座を自らかなぐり捨て、果ては神戸の海岸で行路病人として発見された村橋。「残響」の村橋との久々の再会だった。(大内)